

第三分科会【評価する】「コースデザインは評価にどんな影響を与えるか」

# 日本の大学における経験学習行動 促進のためのコースデザイン

—外国人留学生と日本人学生の共修科目での教育実践—

武蔵野大学

グローバル・コミュニケーション学部

島田徳子

平成28年1月23日(土)国立国語研究所

NINJAL国際シンポジウム「現場を支える日本語教育研究—学ぶ・教える・評価する—」

# 本日の発表内容

- 多様な背景を持つ学生が、大学教育の中で主体的・能動的に学ぶためのコースデザインの一例として、武蔵野大学グローバル・コミュニケーション学部の留学生と日本人学生が共に学ぶコンテンツ・ベースド・ラーニング科目の一つである**日本研究(政治・社会)のコースデザインを事例**として取り上げる
- 本科目の到達目標や評価基準と経験学習行動促進のための取り組みについて報告するとともに、**取り組みに対する履修者の評価**について、履修者を対象に実施したアンケート等の結果を参照しながら実証的に検討する

# 本日の発表の流れ

1. 背景 日本の大学教育を取り巻く現状
2. 先行研究
  - 2.1 日本語教育スタンダードによるアーティキュレーション
  - 2.2 元留学生社員の日本企業における組織社会化と経験学習行動
3. 実践研究の目的と方法
4. 武蔵野大学における教育実践
5. 取組みに対する評価
6. まとめと今後の課題

# 1. 背景 日本<sup>の</sup>大学教育を取り巻く現状

「これからの時代に国内外の新しい社会で主体的に**多様な人々と協力して生活をし、仕事をしていくことができる**よう、個々の学生の**主体性を更に引き出す多様な学びの場**を創り、十分な能動的学修とそれを支える広く深い知識・技能を獲得できるようにする必要がある」

「高大接続システム改革」の一環としての「大学教育改革」(文部科学省 2015)

各大学の**三つのポリシー**により、学生の**入学から学位授与に至るまでの一貫した方針を具現化**し、各方針の**関連性や一貫性が確保**されることの重要性を強調

# 各大学の教育理念に基づく三つのポリシーの一体的な策定を法令上位置づけ、ガイドラインを策定

アドミッション・  
ポリシー  
AP

## 入学者受入れの方針

- ①知識・技能
- ②思考力・判断力・表現力
- ③主体性を持って多様な人と協働して学ぶ態度

の三要素について、各大学で具体的にどのような能力をどのレベルで求めるかを明確化

カリキュラム・  
ポリシー  
CP

## 教育課程編成・ 実施の方針

各大学において、それぞれのディプロマ・ポリシーを踏まえ、どのようなカリキュラムを編成し、教育を行うかの方針を明確化

ディプロマ・  
ポリシー  
DP

## 学位授与の方針

各大学において、どのような能力を身に付ければ学位を授与するのかという方針を明確化  
→その大学でどのような人材を社会に送り出そうとしているかを明確化

# 日本の大学教育における言語教育のコースデザインと評価の今後の方向性

- ◆ 高等教育(大学教育)から**職業(企業等)へのアーティキュレーション**の実現
- ◆ グローバル化社会における**エンプロイアビリティ(職業能力)**をゴールとしたコースデザイン
- ◆ 各大学**3つのポリシーとの関連性や一貫性**について考慮する必要性

## 2. 先行研究

### 2.1 日本語教育スタンダードによるアーティキュレーション

言語教育や外国語教育の目標とは・・・

「単なる言語コミュニケーション・スキルの習得を目標とするのではなく、**社会的な存在**としての人間に必要な異文化理解能力、社会文化能力、学習能力などの**一連の能力の育成を含むもの**」であり、「生涯学習や学校教育以外の学習も視野に入れるなど、**時間的、空間的広がり**が見られるもの」  
(国際交流基金 2009)

「他者との共生のためには「認知能力」「情動的能力」「行動できる力」など市民性形成のための能力が必要であり、言語教育では言語知識の獲得だけでなく**「市民参加」という行動を最終的な目標**としてデザインする必要がある」

(福島 2011)

## 2. 先行研究

### 2.1 日本語教育スタンダードによるアーティキュレーション

言語教育スタンダードとは

- **文化的多様性を尊重する言語教育政策**として、**言語学習の理念や共通の評価基準**を示したもの
- 日本語教育スタンダードは、日本語使用者にとって平和で豊かな世界を共に創り、多様な価値や文化を共に楽しみ、未来に向かってともに成長していくために必要である

これまでの日本語教育スタンダードの開発や導入

- CEFRの共通参照レベルやCan-doを機関内の科目の**到達目標や評価基準**として活用
- 日本語の学習内容の一貫性や透明性といった観点から、より**学習効果の高い日本語学習環境を構築する「アーティキュレーション」**のための取組み
- 教育機関内や教育機関間の**対話や内省**の促進

(島田 2015)



## 2. 先行研究

### 2.1 日本語教育スタンダードによるアーティキュレーション

- 大学間のアーティキュレーション

中国から日本への私費正規編入留学生の

**日本留学のアーティキュレーションモデル**の構築

(島田・堀井 2013, 堀井 2015)

- 中日両大学が提供している日本語科目の達成目標として、CEFRとJFスタンダードのCan-doを活用
- **二国間(母国と日本)及び領域間(教育領域と職業領域)**の日本語能力のアーティキュレーション

# 大学生から仕事へ

## School-to-work transition



働く  
(インターンシップ)

働く  
(就職活動)

働く  
(入社後)

高度人材として  
働くための日本語  
実用日本語1・2

高度人材として働くための日本語

大学で学ぶ

大学で学ぶための日本語  
日本語1・2

必要になってから  
学ぶのでは  
遅い!!!

働く (アルバイト)

アルバイトのための日本語

生活する

生活のための日本語

進学

就職

来日

入学

1  
年生

2  
年生

3  
年生

4  
年生

B1(N2)

B2.1(N1, J2)

B2.2(J1)

C1 (J1+)

## 2. 先行研究

### 2.1 日本語教育スタンダードによるアーティキュレーション

しかし・・・

次の観点からの**効果検証**はなされていない

- 学部の**三つのポリシーとの関連性や一貫性**が実現できているのか？
  - ✓ アーティキュレーションは日本語科目のみ
- グローバル化社会において必要な**具体的なエンプロイアビリティ(職業能力)**の習得に繋がっているのか？

## 2. 先行研究

### 2.2 元留学生社員の日本企業における組織社会化と 経験学習行動

日本の大学・大学院を卒業・終了し、日本社会において元留学生が社会人として適応し活躍するためにはどのような能力を身につけておく必要があるのだろうか？

- 「組織社会化」(organizational socialization)

経営学の組織行動学や人的資源管理の分野を中心に、1960年代半ばから40年以上の研究蓄積

(Ashford & Nurmohamed 2012)

- 元留学生の日本企業での組織社会化

組織に適応するとともに、学生から社会人への役割や立場の変化に伴う日本社会での文化的・社会的適応  
(**社会人としての異文化適応**)も同時に期待される

# 組織社会化

- 学校から職場へ移行した新人が、どのように職場に適応していくのかを多角的な視点から捉える研究
- 組織社会化とは  
「個人が組織の役割を引き受けるのに必要な社会的知識や技術を習得し、組織の成員となっていくプロセス」

(Van Maanen and Schein, 1979, p.211)

## 2. 先行研究

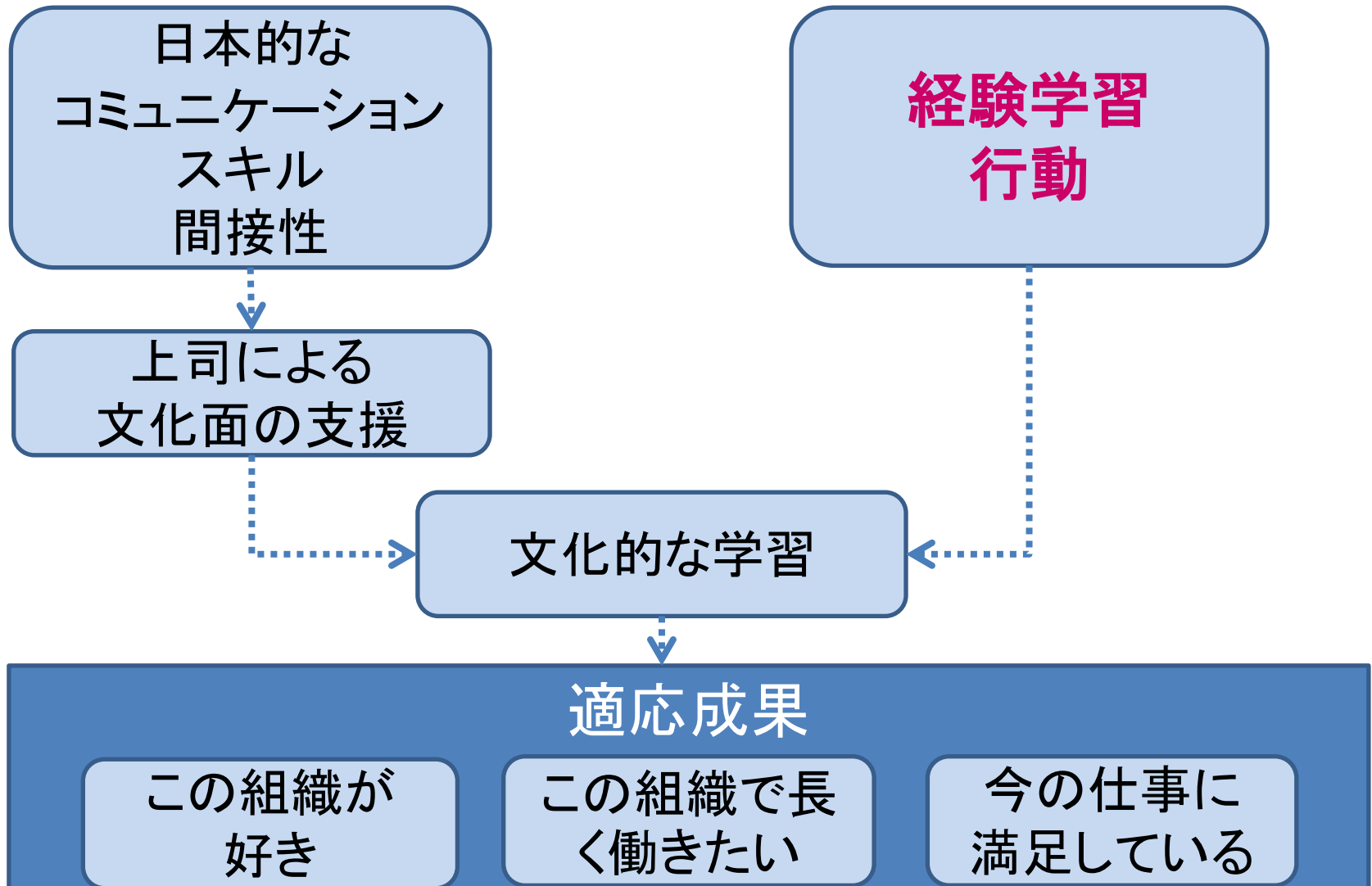
### 2.2 元留学生社員の日本企業における組織社会化と 経験学習行動

- 外国人留学生の**日本企業への就職後の適応**についての実証研究

(島田・中原2014,201X)

- 元留学生の個人要因として、経験から学ぼうとする「**経験学習行動**」の適応に対する影響力の大きさを指摘
- 「文化的学習」の成否が、組織への適応に影響を及ぼす

# 経験学習行動と適応



# 経験学習行動

- 「経験」

1980年代のリーダーシップ開発論を端緒とし、**職場におけるビジネスパーソンの学習に不可欠な要素**（木村 2012）

- 経験学習理論(Experiential Learning Theory)（Kolb 1984）

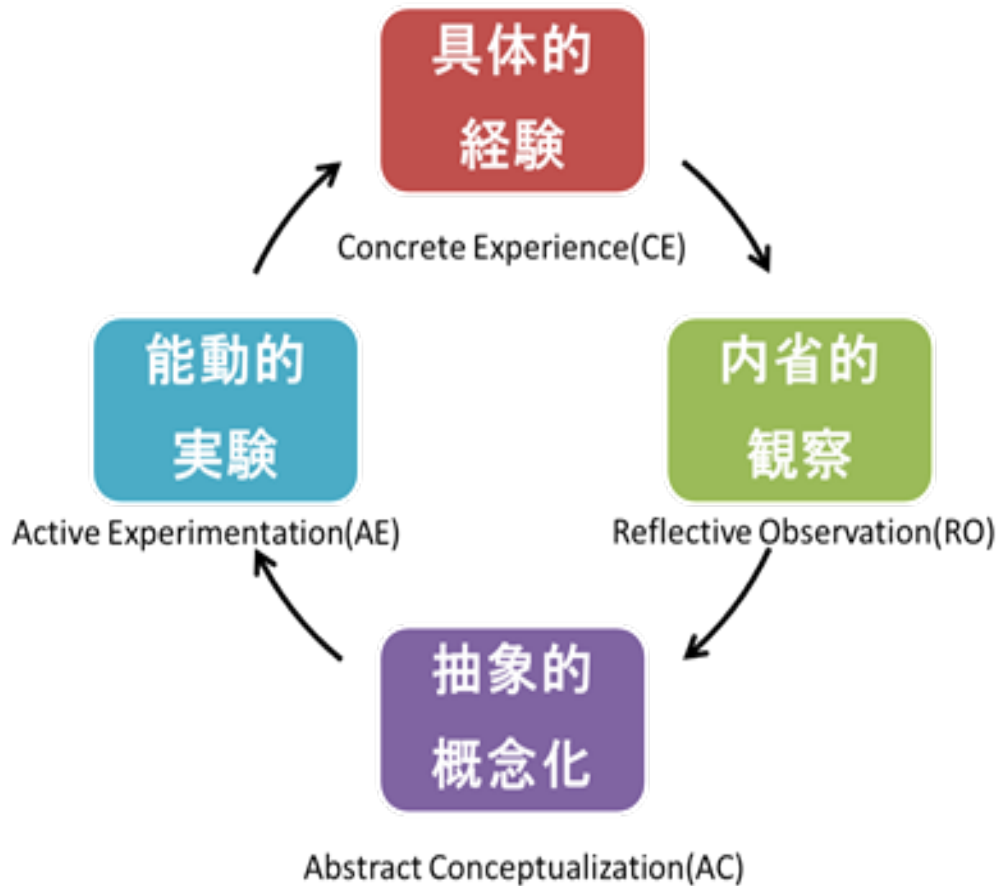
**「学習は、経験を変換することを通じて知識を創造するプロセス」**

- 経験学習モデル(Experiential Learning Model)として提示
- コルブの経験学習モデルは、多国籍企業の海外駐在員の適応に関する研究や、グローバルマネジャーの育成など、**異文化環境**における適応や人材育成に関する研究においても注目される
- Yamazaki and Kayes (2004)は、社会・文化背景の異なる異文化環境における適応において、**異文化経験から学習することの重要性**を指摘



# コルブの経験学習モデル

(出所: Kolb(1984, p.21)のモデルをもとに発表者作成)



学習者は、

- 1) 個人が置かれた状況の中で具体的な経験をし  
(具体的経験)
- 2) その経験を多様な観点から内省し  
(内省的観察)
- 3) 他の状況でも応用できるように一般化・概念化して仮説や理論に落とし込み  
(抽象的概念化)
- 4) その仮説や理論を新しい状況下で実際に試してみる  
(能動的実験)

ことによって学習するとされる

## 2. 先行研究

### 2.2 元留学生社員の日本企業における組織社会化と 経験学習行動

- 近年の研究では、経験を内省する段階における「**他者**」の役割が重視され、「他者に開かれた内省」「他者との対話に埋め込まれた内省」といわれる (中原・金井2009)
- 日本企業に就職した元留学生の「経験学習行動」は、就業年数によって差がみられないことから、**就職前の在学中の経験や学習内容を再考**する必要性を指摘 (島田・中原 201X)

### 3. 実践研究の目的と方法

- 目的  
大学教育から職業へのアーティキュレーションの実現を目指すとともに、グローバル化社会における職業能力の一つとして「**経験学習行動**」を促進することを重視した**コースデザイン**は、学習効果があるのか、**実証的に検討**すること
- 方法
  - 言語能力の到達目標や評価基準の設定には、CEFRの共通参照レベルやB2.2からC1のCan-doを参照
  - **経験学習行動の促進**のために、コルブの経験学習サイクルの四つの段階に応じて、学習成果の可視化（ルーブリック評価など）や、ピアレビューや教師からのフィードバックによる学習者自身のリフレクションを導入

## 4. 武蔵野大学 日本研究(政治・社会)における教育実践

- 武蔵野大学グローバル・コミュニケーション学部の現状
- 学生の1科目あたりの学修時間を確保するとともに、2学期の期間を利用して海外への留学・語学研修を積極的に推進するために、**2015年度から4学期制に移行**
- **各学期8週間(2時限連続または週2回)の授業を基本的な開講形態**とすることで、少ない科目(同時期に履修する科目数は半減)を集中的に履修することで、密度の濃い学びが可能となった。
- 4学期制では、1学期に基礎的な学習を行い、2学期に1学期の成果を土台とした発展的な学習に繋げるなど、**着実に理解をし、知識を積み重ねていくことが推奨**される

# 武蔵野大学グローバル・コミュニケーション学部の三つのポリシー

表1 武蔵野大学グローバル・コミュニケーション学部の3つのポリシー

## <アドミッション・ポリシー>

本学部は、日本人学生と留学生がともに学ぶ環境の中で、英語、中国語、日本語の語学スキルと国際教養を兼ね備え、グローバルに活躍できる人材を育成する。もって以下のような者の入学を求める。

- ・グローバル社会で活躍する高い意欲を有する者
- ・外国語および母語のコミュニケーション能力と異文化に対する関心を有する者
- ・世界を取り巻くさまざまな事象に強い好奇心を有する者

## <カリキュラムポリシー>

グローバル・コミュニケーション学部では、社会人として必要な教養や知識を身につけるための「武蔵野 BASIS（共通科目）」と、人文科学・社会科学諸分野の基礎的な知識を習得するとともにグローバル社会の課題を認識し、その解決策を提案できる能力を養成するための「学科科目」によって教育課程を編成する。また、専門教育は少人数の授業や学生が主体的にかかわるプロジェクト型の授業を中心に展開する。

## <ディプロマポリシー>

グローバル・コミュニケーション学部では、所定の卒業要件を満たし、グローバル社会で活躍するのに必要な国際性・国際感覚や異文化理解能力・異文化適応能力を身につけ、複数の外国語運用力を習得した者に学士（文学）の学位を授与する。

## 4. 武蔵野大学 日本研究(政治・社会)における教育実践

- 日本研究(政治・社会)の科目概要
- 日本研究(政治・社会)は、自分の関心のあるテーマについて、**言語能力とともに知識や思考力を高める「コンテンツ・ベースド・ラーニング」**科目の一つ
- 学部2年生以上の日本人学生と留学生が共に学ぶ**共通科目**であり、1・2学期と3・4学期に開講される
- 1学期間、**週1回90分の授業が2時限連続**で8週間行われ、16時限で2単位取得となる
- 言語能力の目標設定は、先に述べたとおり、CEFRの**共通参照レベル**や**B2.2からC1**のCan-doを参照

# 表2 日本研究(政治・社会)の 到達目標及び授業概要

1. 現在の日本社会において、政治・社会に関する話題性・関心の高いテーマを取り上げ、新聞記事を中心としたある程度長い複雑なテキストを、筆者の立場や意図を含めて詳細な点まで理解することができる。 (新聞記事読解、要約)
2. 社会的問題に対して、自分の考えや意見を正確に表現でき、複雑な議論になっても、説得力を持って自分の見解を示すことができる。 (ディスカッション)
3. 前半の新聞記事読解とディスカッションで扱った政治・社会に関するテーマの中から、自分自身が深く探究したい問い(リサーチクエスチョン)を立てて、テーマに関連する資料を収集し、問いに対する自分の主張を、なぜそう考えるのかの根拠を示しながら、論理的に述べたレポートを作成する。 (テーマレポート執筆)
4. 3のレポートの内容について、補助的な視点、理由、関連する事例を上げながら説明したポスター(A3 1枚)を作成し、わかりやすく詳しく説明することができる。 (ポスター発表)
5. テーマに関連した基本的知識や専門用語を身に付ける。
6. 情報収集能力、論理的思考能力、情報発信能力、自律的学習能力の向上を目指す。

回	月/日	授業内容	課題
1 2	11/24	3学期の振り返り 4学期のMY GOAL 設定 3学期に作成したポスター発表会の準備	MY GOAL 設定シート ポスター発表の原稿準備
3 4	12/1	MY GOAL 設定シートの相互レビュー ポスター発表&ディスカッション 4学期に探究したいテーマの設定(各自)	相互コメント
5 6	12/8	個人テーマの設定&計画&情報収集	テーマ設定シート
7 8	12/15	テーマ設定シートの相互レビュー	相互コメント
9 10	12/22	レポート構成シート作成と相互レビュー	レポート構成シート
11 12	1/12	レポート&ポスター第一稿 クリティーク&推敲	レポート&ポスター第一稿
13 14	1/19	4学期作成ポスター発表&ディスカッション	相互コメント レポート&ポスター完成版 レポート自己評価表
15 16	1/26	振り返り	振り返りレポート



# 学生の探求したテーマの例

- マイナンバー制度は留学生の生活にプラスになるのか？
- 日本の少子化は、誰の責任か？
- 保育所を増やして、待機児童を減らすことができるのか？
- 日本は難民を積極的に受入れるべきか？
- 日本でISのテロが起きる可能性はあるのか？
- 中国人来日観光客の爆買いは、中国国内の産業にどのような意味をもたらすのか？
- 夫婦選択制別姓は日本で定着するのか？
- 選挙権18歳引き下げは効果があるのか？

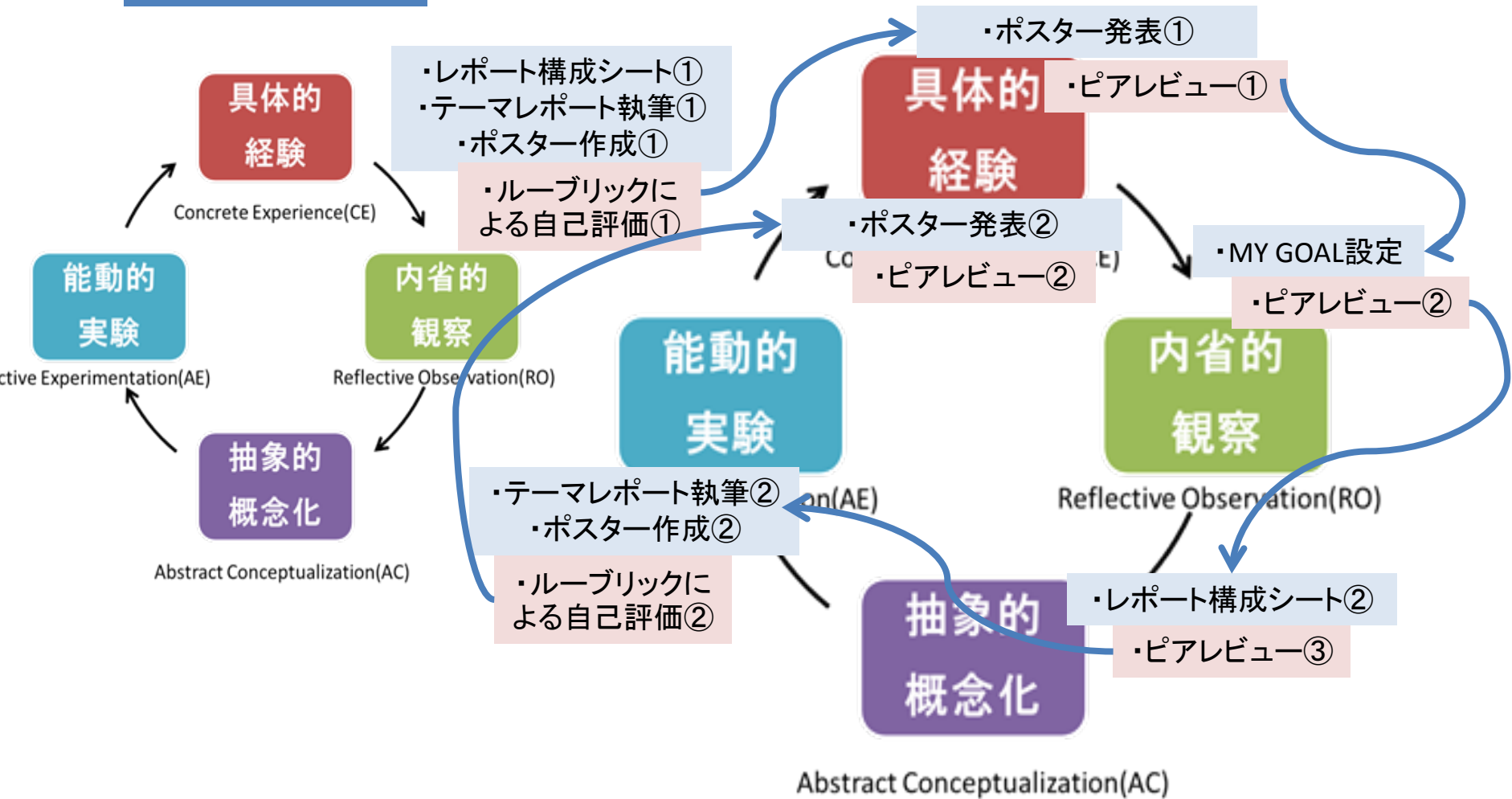
## 4. 武蔵野大学 日本研究(政治・社会)における教育実践

- 表3は、コルブの経験学習サイクルの四つの段階に応じて、3学期4学期の2学期間の**タスクと評価活動を整理**したもの
- 3学期は、基礎的な知識とスキルの習得
- 4学期は経験学習行動促進のための**タスクと評価活動の繰り返し**に重きを置いた

# コルブの経験学習サイクルの四つの段階と タスク&評価活動

3学期

4学期



# 5. 経験学習行動促進のための取組みに対する履修者の評価

## ● 方法

経験学習行動促進のための取組みとして4学期に行った、(1)MY GOAL設定シート(2)レポート構成シート(3)ピアレビューの三つの評価活動の方法について、自身の学習に効果があったかどうか、履修者を対象に自由記述式のアンケート調査を実施

## ● 対象者

3学期4学期の履修者38名(日本人学生13名、留学生25名)のうち、23名(日本人学生6名、留学生17名)の回答を得た

# 追加の参考データ

## ● 授業評価アンケートの総合的な評価

- ・この授業を他人(友人)に進めたいと思うか 4.5
- ・総合的に見て満足しているか 4.5

## ● 3学期と4学期のテーマレポートのルーブリックによる点数評価の平均値の比較 (65点満点)

	3学期	4学期
平均	46.14	53.62***
標準偏差	11.27	11.98

( $t(35) = -3.89$   $p < .001$ )

# アンケート結果のまとめ

- (1)MY GOAL設定シート(2)レポート構成シートについては、**否定的なコメントはみられなかった**
- ピアレビューについては、肯定的で具体的なコメントが多く、個人の自らの経験や出来事の意味づけが、**他者からのフィードバック**や、**他者との双方向の会話**などによって促進されることが示唆される。しかし、積極的に参加しない他者の**レディネスを高める**ことは課題として残る

# (1) MY GOAL 設定シート

- 3学期に何ができていなかったのか明確にでき、4学期にどうすれば良いかわかった。(J)
- 自分が今何を目標に学ぶべきかもう一度しっかり考えることができた。(J)
- MY GOALを明確にすることで、自分のやらなくてはいけないことがわかった。(J)
- 目標を明確に示したことで、更にその目標を達成するよう努力した。(J)
- 自分の目標をもう一度把握することができ、やるべきことが見えてきます。(F)
- 3学期の評価により自分が足りないところがわかりましたので、特にどこに力を注ぐべきかわかりやすいと思います。(F)
- 足りないところを見つけ、4学期のレポートを書くため役立ちました。(F)
- 3学期の評価を見て、自分が足りない部分が分かって修正できます。(F)

## (2) レポート構成シート

- 役立つ、いきなりレポートを書くと根拠と論拠が繋がってなかったり、筋道を立ててレポート執筆ができない。(J)
- 役立つと思う、前期よりも内容のあるレポートが書けていると自分でも思うし、レポート執筆する際、時間短縮にもなっている。構成の段階で十分に練られていれば良いレポートに繋がる。(J)
- とても役立ちます、論文を作成する前に構成シートを書くのは、全体チェックになり、結論の分析につながります。無駄な書き間違いを防げます。(F)
- とても役立ちます、構成シートを見ながらだと時間がかからないし、足りないところがあればすぐ発見できる。(F)
- 役立つ、自分のレポートについて、構成の再チェックができると思います。(F)



# (3) ピアレビュー

- グループの人のコメントをもらうことで、自分が気がつかなかった間違いや他の意見をもらえるため、レポートを書くために効果的だと思う。(J)
- 留学生にはすごく助かるものだと思う。「ここをこうすべき」という指摘ができるようになったのは、日本人学生にとっても効果的だと思う。しかし、自身のレポートに繋がっているかはまだわからない。(J)
- 相手に伝えわるレポートを書くために、他学生の意見を取り入れることができた。(J)
- 他のメンバーに説明するために、自分の考えがはっきりしていないとだめなので、それによって自分のレポートをどういう風に書きたいかをよく考えさせられると思います。(F)
- テーマが違うので、政治・経済に関する知識が深まりました。また、メンバーから意見ももらって、レポートの構成に役立ちました。ただ、遠慮がちのメンバーもいるので、素直に意見を言わない人もいました。(F)
- 自分一人で考えたことは限りがあるので、グループみんながお互いにコメントしたり、足りないところを指摘したりして、また新しいアイデアや直すところが出てきます。自分の足りない部分が見つかって、自分の考えを深めることができる。(F)
- 効果的だと思う、グループの他のメンバーからのコメントは、大切なポイントで、自分のレポートやポスターの質を高められる。また、グループの他のメンバーのコメントは、自分と全く違う視点で問題を考えていて、自分の主張や考え方などをもっと豊かにすることができると思う。(F)
- 人の話を真剣に聞きコメントする人と、そうでない人がいるので、いまいちに感じる。しかし、実施しないよりはましだと思う。(F)

## 6. まとめと今後の課題

- 本科目のコースデザインでは、大学教育から職業へのアーティキュレーションの実現を目指すとともに、グローバル化社会における職業能力の一つとして「経験学習行動」を促進することを重視したが、経験学習行動促進のための評価活動に対する履修者のアンケート調査およびレポートの評価では**肯定的な評価**が得られた
- 武蔵野大学グローバル・コミュニケーション学部は、2016年度から「グローバル学部」に改称するとともに、新学科「日本語コミュニケーション学科」を設立する
- **「新学科の三つのポリシーや他の科目群との関連性や一貫性について具体的に検討すること」、引き続き「グローバル化社会において必要な具体的なエンプロイアビリティ（職業能力）の習得に繋がっているのかを検証すること」は、今後の大きな課題である**

# 参考文献

- (1) 木村充(2012)「職場における業務能力の向上に資する経験学習のプロセスとは 経験学習モデルに関する実証研究」中原淳(編著)『職場学習の探究 企業人の成長を考える実証研究』生産性出版, 33-71
- (2) 国際交流基金(2009)『JF 日本語教育スタンダード試行版』国際交流基金
- (3) 島田徳子(2015)「日本語教育スタンダードの源流・現在・未来を探究する—誰のための、何のためのスタンダード?—」『日本語学』34(12), 明治書院, 44-54
- (4) 島田徳子・中原淳(2014)「新卒外国人留学生社員の組織適応と日本人上司の支援に関する研究」『異文化間教育』39, 92-108
- (5) 島田徳子・中原淳(201X)「新卒外国人留学生社員の組織社会化のメカニズム—経験学習行動と異文化間ソーシャルスキルに注目して」『人材育成研究』XX, XX-XX 印刷中
- (6) 島田徳子・堀井恵子(2013)「日本留学前後の中国人私費留学生の日本語能力と日本語使用／学習に関する研究—J-GAP中日アーティキュレーションプロジェクトの質問紙調査から—」『日本語教育学会秋季大会予稿集』, 157-162
- (7) 中原淳・金井壽宏(2009)『リフレクティブ・マネジャー:一流はつねに内省する』光文社
- (8) 文部科学省(2015)「高大接続システム改革会議「中間まとめ」」
- \* 福島青史(2011). 社会参加のための日本語教育とその課題—EDC・CEFR・日本語能力試験の比較検討から『早稲田日本語教育学』10, 1-19. (発表時に追加)
- (9) 堀井恵子(2015)「Can-doを活用した学部日本語カリキュラムのリ・デザイン—J-GAP中日アーティキュレーション・プロジェクトの活動から」『武蔵野大学教育研究センター紀要 Global Communication』第5号, 77-87
- (10) Ashford, S. J. & Nurmohamed, S. (2012). "From Past to Present and Into the Future: A Hitchhiker's Guide to the Socialization Literature." In Connie R. Wanberg (ed.), The oxfordhandbook of organizational socialization. NY: Oxford University Press. 8-24.
- (11) Kolb, D. A. (1984). Experiential Learning. Prentice Hall.
- (12) Yamazaki, T. & Kayes, D. C. (2007). "Expatriate learning: exploring how Japanese managers in the United states." International Journal of Human Resource Management, Vol.18 No.8, 1373-1395.